



加藤 淳（かとうじゅん）日本コカ・コーラ株式会社勤務／2008年プログラム参加

人生のターニングポイントになったiLEAPでの経験

大学3年生のころにプログラムに参加した私は、国際経営学科出身でマーケティングを専攻していました。当時企業の持続的総長のために利益をいかに創出するか、ということが最大の関心事だったのですが、このプログラムに参加をすることで人生のターニングポイントとも呼べる濃密な体験をしました。Britt先生からのレクチャーに加えて、実際にシアトル現地の企業を訪問したりNPOでプロジェクトに参加させていただくことを通じて、「NPOやNGOでも継続的な成長のためには利益が必要不可欠だし、彼らは出た利益を社会に還元していて、利益創出という意味において企業もNPOも変わらないんだ」ということに気づかされました。基本的なことですが当時NPOはボランティア、という典型的な固定観念を持っていた私にとって創出した利益を社会に還元してWINの輪を広げていくという仕組みに心打たれました。

帰国後iLEAPでの学びを生かした活動を実施

3週間の経験の後、日本で同様に利益創出しつつ社会貢献活動を実施している企業を探してインターンを申し込み、TABLE FOR TWOというNPOに出会いました。彼らは先進国でのヘルシーな食事の代金の一部を途上国の子どもの給食費に充てる、という活動をしています。その中にはヘルシーな商品の代金の一部をTFTへの寄付に充てる、という取り組みも行っており、私も今年、福島農家の農家さん、一般社団法人東の食の会と一緒に「りんごポリフェノールのチカラ」というドライフルーツを企業や学校向けに企画開発しました。この商品の売上の一部は途上国の子どもの給食になる、そんなWINが広がる仕組みのひとつの事例を体験することが出来ました。社会人になって8年、こうした一連の体験を本業以外で経験させてもらっているのも、振り返ればiLEAPでの体験がきっかけになっているし、これからの人生においても自身ができる形で、自身のペースでこうした活動を継続していきたいと思っています。

三塩菜摘（みしおなつみ）

NPO法人コラボキャンパス三河ディレクター、WATASHI設立者（法人化予定）／2014年プログラム参加

iLEAPの卒業生コミュニティからきっかけが生まれた

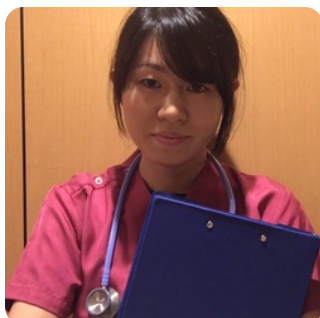
iLEAPプログラム卒業生の、ハバタク小原さんのベンチャー・ベトナム支社でキャリアがスタートし、多くの東南アジアの卒業生にも会いに行きました。それらの経験からわたしは自分の原体験が『（日本の）教育』にあることに気づき、母国に帰って活動したかったんです。NPOで働くということに興味を持っていたのも、iLEAPでの経験があってこそです。

自身の変化と成長の実感が学びの設計に生かされている

自分自身が、iLEAPの洗練されたプログラムで大きな変化と成長を体感しました。その経験が、自身のNPOで新しい教育プログラム（学びの設計）をつくる際に大きく役立っています。

アントレプレナーシップとリーダーシップを学んだ

iLEAPで学んだアントレプレナーシップとリーダーシップを自分の活動に反映させています。現在ディレクターという立場でNPOを経営し、自身の法人も立ち上げをしようと思っています。根源には、アントレプレナーシップやリーダーシップの在り方は多種多様であり社会での役割分担なのだという気づきです。自分に対する肯定感と可能性を教えてくださいました。



若森映枝（わかもりあきえ）小児専門病院勤務／2016年プログラム参加

漠然としていた考えが具体化

元々、子どもの貧困問題や虐待問題に関心があり、子どもたちの健やかな心身の成長と子ども自身が考えて行動する力を引き出せる様な仕事をしたいと考えていました。SeattleでiLEAPのプログラムに参加する以前は、漠然とした考えだったのですが、内省や同期との交流、Seattleの街や人々との関わりの中で、看護の視点を活用し、社会問題を解決するような仕事を始めたいと考えようになりました。現在は、自身のビジョンを実現するための最初のステップとして、臨床で様々な疾患を持つお子さんやご家族との関わりの中で医療や看護について学びたいと考え現職に就きました。

心の健康を維持しながら働く方法を身につけることができた

命の現場で働く中でプレッシャーを感じることや、それぞれの立場の思いが複雑に絡み合い、様々なジレンマを抱えた医療現場で働くことは、心身の置き所のなさに苛まれたり、疲弊することもあります。しかし、iLEAPのプログラムでも実践した内省をする時間を取ることで、自身のトリガーを発見したり、心の健康を維持しながら働くことができていると感じています。



深澤まふね（ふかさわまふね） & 成田航平（なりたこうへい）

早稲田大学社会科学部4年

東京大学法学部4年

Gate10 projects OU共同設立者／2017年プログラム参加

iLEAPプログラムがきっかけで会社を立ち上げ

Gate10は「社会経済的理由による機会不平等をなくすこと」をミッションに様々なプロジェクトを行う会社です。iLEAPの同期卒業生と一緒に立ち上げ、いくつかのプロジェクトには他の卒業生たちも関わっています。関わっている同期のほとんどが来年から一般企業で働く予定ですが、就職後も自分の成し遂げたいことを達成するために行動するという事は変わらないと考えています。このようなライフミッションを意識するようになったのはiLEAPのプログラムがきっかけです。



プログラムでの経験を元に教育プログラムを作成

現在Gate10で作っている教育プログラムは、iLEAPで自分たちが経験したことを踏まえて作成したものです。iLEAPでどんなプログラムが行われたか、そのそれぞれがどのように影響したかなどを卒業生達と考えながら作成しました。

行っているプログラム／プロジェクトの例

- ・女子教育プログラム(ジェンダー役割意識に影響されない主体的なキャリア選択をできるようにするため。PBLの手法を用いる)
- ・地方教育プログラム(経験や情報の少なさから消極的な考え方に陥りがちな地方の生徒が、選択肢の中から選ぶ進路選択ではなく、自分のやりたいことから逆算して選択肢を作れるようにするため。)
- ・社会に蔓延する偏見をなくすための教育サービス作り
- ・ジェンダー不平等をアートをつかって指摘する啓蒙プロジェクト



大角麻亜紗（おおすみまあさ）

東京外国語大学休学中／NGOエクマットライントーン／2016年プログラム参加

他人の目を気にするのではなく、自分で自分を認める大切さ

iLEAPプログラムが私に教えてくれたこと、それは自分自身を自分で認めることです。私は今まで、世間の流れになんとか流されたまま進んできて、いつも他人に認められなければどこか不安を感じているような状態でした。何をしても気になるのは人の目、自分がどれだけ努力しても、その努力の矛先は自分に向いていませんでした。しかしiLEAPと出会って、人との関わりの中で自分と向き合い、自分を認めることを知りました。私は、自分を認めることは他人を認めることよりも難しいと思っています。ただこれをしないまま前に進んでいくことで、きっと何か大事なものを直視せずに進んでいってしまうのではないかと直感的に感じました。

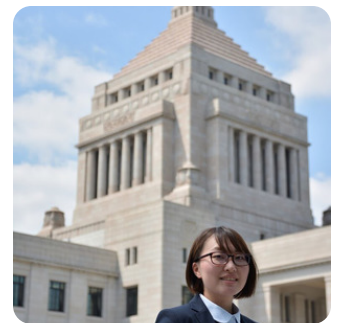
自分に正直に向き合えるようになったからこそ、周りの人にも真正面から向き合えるように

自分に正直に向き合うことができるようになったからこそ、子供たちにより真正面から、心の奥底までさらけ出して向き合おうとする姿勢が身についたと思っています。私は今、こういう姿勢で彼らにぶつかってみて初めて、彼らの心を動かすことができ、何か残せるのだと信じています。エクマットラは、バングラディッシュで気の遠くなるような格差をなくすために活動し、人に対して前のめりになって向き合ってくれる仲間がいる団体です。社会の闇に揉まれた人間の心の奥深いところに真正面から向き合って、路上からの大逆転を目指す。どんなことにも本気で向き合うエクマットラで、周りの人々はもちろん、自分にもっと向き合いたいと思い、現在インターンとして活動させていただいています。

渡辺容子（わたなべようこ） 衆議院事務局勤務／2015年プログラム参加

自信を取り戻すことができたから今の仕事を選んだ

議会運営に携わりたと思った理由は、法律や政治制度に興味があると自信を持つことができたからです。大学で法律を専攻しながら、この先の人生において自分自身が何をしていきたいのかよくわからなくなった時に会ったのがiLEAPでした。プログラムでは異なるバックグラウンドを持つ者同士が集まり、それぞれが異なる考えや目標を持ちながらも、実は似たような悩みを抱えていることを分かち合いました。日々の忙しい中で見落とし見失っていたことを、改めて拾い上げてじっくりと向き合う時間を持てたことや、それらのことを共有できる仲間を得たことで、自信を取り戻しました。そして、他の人からどう思われようとやりたいことをやると心に決めて、行動した結果、今の場所に落ち着きました。



プログラムで学んだ、お互いを認め尊重し合う働き方

プログラムを通して、周囲の仲間たちの多様さを認め合うことが、自分だけでなく組織全体としての成長と発展に繋がることを学びました。多様さを認めるということは、異なるバックグラウンドを持つ他者と他者が、たとえ相手のことを理解できないとしても、互いを排斥せず同じ社会の中で共生することだと考えます。私は、その認め合った先にあるものとして、互いが誇りを持って生きること掲げました。互いの職務に「誇り」を持てるような環境づくりに寄与したいというマインドを持ち、日々メンバー同士の関係を意識しながら働いていることに、プログラムでの学びが生きていると感じます。